

佑 啓

ふる里学会・和田浦 〒298-2725 安房郡和田町黒岩 1190-1  
tel 0470-40-7227 mail fgakusya-wada@blue.com.ne.jp

社会福祉法人 佑啓会  
http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/  
発行者 里見 吉英 編集者 三股 金利

ふる星学舎 〒290-0265 市原市今宿 1110-1  
tel) 0438-36-7611 mail) fsktusu@speech.ocn.ne.jp

この二カ月ほとんど休みもなく、契約、契約の毎日だった。契約書と重要事項説明書は七種類も作成し、読み上げ説明は十数回を数えた。契約希望者が当初の見込みの倍以上の人数にのぼり、ひどい時は和田浦で午前中三回、飛んで帰って市原でもということもあった。保護者の皆さんも、よく解らないのでとりあえず契約をしておこうという方も多かったのではないか。

一時聞ほどウトウトしたたろ  
 うか、あたりは一面雪と白樺林  
 に囲まれていた。ただポーツと  
 車窓から流れる景色に見とれて  
 いると、突然「こんなところに  
 富士山が」と思えるような雪を  
 いただいた羊蹄山が姿をあらわ  
 した。ウーンこれはすごい、や  
 はり北海道だスケールが違う。

千蔵空港に降り立つとまだあちこちに土で汚れた雪が大きな固まりとなつて積まれていた。この時期のせいか、北海道を訪れる人も少ないらしく、大型送迎バスに乗り込むと、我々一行五人の貸しきり状態だった。一路西へ、ニセコ・ひらふ温泉へと向かう。

羊蹄山を臨む

里見  
吉英

当事者である利用者はほとんど理解できないだろうという中で、展開のために、どこのサービス提供事業所もどこか胸の片隅にひっかかりを抱きながらすすめたというのが実感なのはなかったか。

後見人及び後見監督人にきちんとした本来は醇善者にきちんとした本人が種々な不利益を被らないようにガードする意味はあるものの、身上監護という生活面での支援に關しては効果をあげることは少ないだろう。本来、障害者の後見人は、将来に亘つて見守り状態のはかれる、法人後見人がベストだと思うが、その後の制度もなかなか前へ進まないなかでのスタートである。しかし、悪いことばかりではないだろう利用者の方にとって居宅支援サービスは受けやすくなったように。そう信じて走りながら検証し、良い方向へ修正を加えていくことが必要だろう。今後行政にも柔軟な対応を望みたい。なにはともあれ契約制度はスタートした。

こんな事を考えながら羊蹄山のふもとをぐるりと一周したところにはひらぶ温泉はあった。連れの面々も目を覚ましたようである。「えんちよ、すごい景色ですよ。」やはり来てよかったですね。さあ滑ろう、滑ろう。」

北海道の雪、パウダースノーを想像していたが、この時期はやはり低いところはベタベタ、高地に行くとかチかチの水状態だった。俺ってこんなに下手なっただけ。しかし真正面の羊蹄山に向かって滑り降りる感覚は

最高だった。温泉につかり、夕食。とにかく考えられないような安いツアーなので、料理は期待していなかったが、いやいやどうして、なかなかのものだった。お腹も満たされ、「さあスナックかカラオケでも行こうか」「お客さん、この時期はそういうところは全部閉まっていますよ」とお内儀さん。「えーっ、じゃあ俺たちこれからどうするの」「部屋にこもるしかありませんよ。この時期、外は何もありませんから真っ暗ですよ」と突き放され、「えんちよ、たまにはトランプでもやりますか。パパ抜きとか七並べとか。なつかしいでしょ?」「ハハハ、おいおい勘弁してくれよ」九時には就寝、六時起床という修行僧のような生活をさせていたのだとお蔭で、覆れたノドも元に戻り、あつという間の三日間だったが

久しぶりにゆつくりできた。  
体調万全。

夜十一時過ぎに、ネオンキラキラの羽田に降りたつた。施設に電話すると「えんちよ、明日は午前四〇名、午後四〇名の契約の予定ですから、よろしくお願いしま〜す」という鬼のような係長の声が飛び込んできた。「この忙しい時に三日も休んで北海道なんて」という、恨みのこもった口調であった。

後日談



「えんちよ、この旅行!まさか『佑啓』に書かないでしょうね!」  
「どうして?」

「この前、他の施設長さんから、おたくの園長、忙しい、忙しいと言いつながらけつこう遊んでるんじゃないのって言われまして」

「忙しい時だからこそ遊ぶ。これれ私の哲学。いいだろう」

んですが」

一帯の職員が行きたがるから、  
しょうがなく付き合ってるんだ  
よって」

$\Gamma = \{C_1, \dots, C_n\}$

「しやあ君還に？」

「えんちよに誘われて、断れないから行くつて・・」

ス、ス、ス、ス

「じゃあ今度はどこへ行きまし  
ようか、フフフ」

(理學)

ふる里学会アネツサ

デイセンダー

オープン！

「ふる里学舎アネッサデ  
イセンタ―」が姉崎保健  
福祉センタ―（通称アネ  
ッサ）内に四月一日、オ  
ープンしました。

今、すでに社協が実施している身体障害者デイサービス事業をそのまま引き継ぐと共に、児童デイサービスと重症心身障害児(者)の機能訓練の場としても活用することとなりました。

○分程のところですので、お近くにお越しの際には是非お立ち寄りください。

## 「契約」しました

井村 美代

措置から契約？障害者本人が自己決定？サービスを選択して契約するんだって。そんな事出来るの？カレーがハンバーグ位なら選べるんだけど。第一選択出来る程のサービス基盤はないんじゃない？ガタガタ言い乍ら、やっと支援費制度なるものが、おぼろげにつかめて来たのは、つい最近のこと。

鴨川で市原の行政の方からお話をうかがい、一番頭に残ったのは、情けない事に負担金が増えるという事です。だって措置からの移行だからあまり大きな変化はない筈とか言うのは嘘だったの？でも三年先よね、ところがそれは措置期間を含めての事とわかり、親しい不安がひろがります。(ふる里のお母様達の話ではありません、念の為)

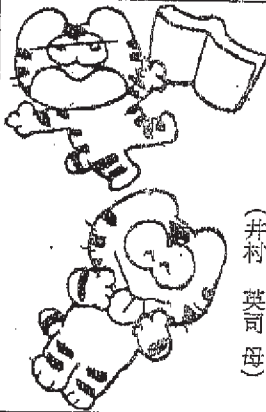
「日用品費の控除を全く認めないって、何か実情と違うと思うけど」「地域との格差と言っているのは解るけど、でもあまりにもすごい値上げよね」「当事者団体は苦渋の選択とかで認めてしまったんだから私達の文句の持って行き場所もないし」「この部分で本人達の生活の幅を広げたり質を高めたり出来る大事なお金でしょ、制度の改定で食しくなるって何か変よね」「キーワードは地域と言っているのはわかるけど現在、十何万人もいる入所者の生活の質、低めてもいいのかな」「地

域だって、只出りやいってものじゃないし」「施設の運営も前より大変になるみたいだし」「お金お金で心の部分が欠落しちゃったらわびしいね」「とにかく信頼関係持つて何でも話し合つて一度きりの人生だもの、なるべく楽しい生活させて貰いましょ」

「でもそれにはお金がいるのよね」と堂々廻りの長電話、疲れ果ててののです。そして契約の日がきました。職員の方が優しい笑顔で「英司さんは四月から今迄みたいにふる里に来て、みんなと作業したり、旅行に行ったりしますか？」彼は首を縦に振りました。言葉は理解出来ない筈だけど、雰囲気はわかるから。署名捺印がすんで、私はホッと一息。で、つい軽口を叩きました「これって何かむなしくありませんか？」困った様な職員のお顔を見て、しまったと思いました。本当に申し訳ありませんでした。毎日こんなに忙しい思いをされているのに。でも、もし同じ笑顔で「今度オウチに帰ったら四月からはふる里学舎に来るのは辞めますか？」とニコニコと聞かれたら、この言葉の一部には確実に反応する筈だから、きつと大きくうなずくに違いないありません。コワイ！

これから何卒よろしく、お願い致します。

(井村 英司母)



## 契約書作りました

林 博樹

この三月・四月は、いや本当に忙しい毎日である。

特に支援費に絡む契約書作りは、正直な所、かなり難儀した。入所・通所・短期・グループホーム・デイサービスに加えてこの春から新規事業として始めた身体障害者のデイサービス及び児童デイサービスと七種類を作ることにになりその案を任された。俺でいいのかよという不安もあったが、自分をアピールするチャンスと思い取りかかった。・・・ものの。

「これじゃ、誰も契約しねえヨ。もうちょっとましなの作れねえのか。」毎夜遅くまで考えた俺デキには、イケてる案案が、たつたの一言と共に突きかえされる。「そりゃやねえだろ。超無名、四流大学卒の俺に契約書なんか作れるか。」と叫びたい所をぐっところらえて「わかりました。もう一度作ってみます」と意気込みだけは見せ、翌日、これでどうだという物を差し出すものの、やっぱりボツでした。

さすがに、こりや現場じゃ駄目だと思つたらしく、その日から某幹部自ら鉛筆なめなめ取り組むことになったのだが・・・

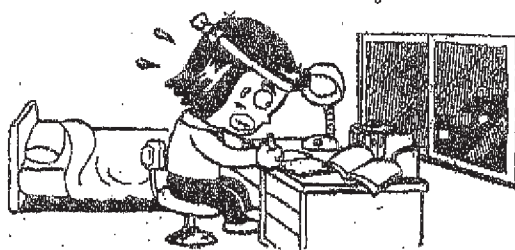
「だめ、駄目、ダメだつてば。ここはこうして、やっぱ、こうだ」さすがの工係長も施設長や他の幹部からぼろくそ状態である。しまいに、業を煮やし、施設長自らが同級生だとかい

う法人の弁護士さんに何度も相談に行つたとかいう噂も流れてくる。いつもは七時になると暗くなる園長室から十時、十一時まで打ち合わせの音がもれていた。

そしていざ契約。さて、どんな質問が飛び込んでくるやら？と落ち着かなかつたものの、何事もなく終了した。他施設では、利用者からの反対があつて、事業所側が契約の文面を変えざる得なかつたという話も聞いていただけに拍子抜けしてしまつた。

「中身は、良くわかんねえけど、ふる里学舎だつたら、大丈夫だと思つたからハンコ押したよ」と話された方もいる。おいおい、そんなに判子押されちゃ困るよと思う半面、結局、信頼関係だよと言わんばかりの、この方々の言葉が妙に、本質をついているようにも思える。

とにかく、契約書の印刷の量も半端じゃない。支援費になり、全国の支援費に關係する福祉施設が一斉に契約書をお互に今年度の紙の消費量を想像して見たりする。いつ



たい、支援費の影響で、どの位の木が減るんだらうと、しょうもないことを考へてしまふのは、やはり四流大学卒の証である。

ともあれ、難しいことは良くわからないが、契約の仕事はひとまず終わらせようである。結局、自分は印刷に専念したただけだつたが。

「林、あつ、じゃなくて林さん。次はこれ。遅れるなよ。」またもや某幹部からの仕事である。名前に「さん」をつければいいってもんじゃねえだろ。う。ったく。

(サブコーディネーター)

編集後記

もつともつと支援費制度を理解しなければと反省の日々。更に「アネッサ」のオープン。そして、佑啓の発行も重なり、この時期は特に忙しい年度始めを迎えています。

忙しさをアピールしながら明日は芝生の上で会議？「ゴルフ」に行く予定です。「忙しい時こそ遊ぶ」あれ？何処かで聞いたような台詞・・・

明日はよろしく願います。

えん・ち・よ！

佑啓四十九号を

お届けします。

宮崎 理